

# 新治小学校だより



ひびく心 はずむ体 見つめる目  
～新治のよさを持続して生かしながら、  
よりよい社会を創ろうとする子どもを育む学校を目指して～

令和5年度  
6月号  
令和5年5月30日



## ともにはぐくむ（はぐくみ協働運営協議会）

校長 川島 広子

今、新治小学校の周りには蛍が飛んでいます。夜8時頃に見に行くと、正門横の小川に10頭前後のゲンジボタルが淡い光を放ちながら飛んでいました。正門の看板に止まったり、校庭に入り込んだりする蛍もいます。通用門の辺りにはさらにたくさんの蛍を見ることができました。翌日の朝会で、蛍の生態を紹介した分かりやすい動画をみせ、「きれいな川にしか生息しない蛍が正門で飛んでいるのは横浜市でも新治小学校だけかもしれないね。凄いことだね。」という話をしました。次の日、家族で蛍を見に行きましたと報告に来る子、学校のビオトープに蛍のえさになる貝がいたよと話しに来てくれる子など（残念ながらサカマキガイでしたが…）、多くの子どもが興味をもってくれたようでした。新治の子どもたちにとって、蛍は普通にいて当たり前存在なのかもしれませんが、きれいな水が流れる川があるからこの美しい幻想的な光を見ることができていることに気づき、蛍が住める環境の保護のために自分に何ができるかを考えるきっかけになって欲しいと思い、朝会の話題にしました。

さて、今年5年生は、「総合的な学習の時間」で田植え学習を行っています。田起こし→くろつけ→代掻き→田植え→草刈り→稲の花観察→収穫→脱穀の一連の作業を実際に田んぼで実施します。田んぼは地域の方にお借りしたもので、田植えに詳しい方に教えて頂き、さらに、保護者や支援の方々もお手伝いしてもらいながら行います。バケツで苗を育てている都会の学校との圧倒的な差は、天候、気温がダイレクトに作業（授業）に影響する点です。24日には田植えを行ったのですが、前日の雨で田んぼは水分を含み、ぬかるみがひどくなっていました。子どもたちは歩くのに難儀しながら、2時間もの間、腰をかがめて田植えをしました。苦労して田んぼ1反に苗を植え終わった後の達成感は大きかったと思います。この田んぼ学習は20年前、農家の多い新治の町なのだから丸ごと1反田んぼを借りた体験学習ができると、当時の校長がカリキュラムに取り入れたそうです。しかし、田植えの事など知らない教員にとっては負担が大きく、当時は多くの反対があった中、地域の方々や保護者が協働して下さることで実現し継続されています。実体験の学びをさせる目的は、生育過程の理解という理科的な側面だけでなく、作物を育ててくれている農家の方への感謝の気持ちや、支援してくれている地域の方の善意に対する感謝の気持ち、食べ物を粗末にしない態度を育てることにあります。これはまさにSDGsの目標実現に通じます。手軽なバケツ苗より手間や時間のかかる実体験の田んぼ学習の方が、子どもたちの深い学びとなり、それを支えて頂いている新治小学校の地域・保護者の皆様には感謝に堪えません。

5/22に地域と学校とが連携・協働し地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるための「はぐくみ協働運営協議会（学校運営協議会）」が行われました。3年間のコロナに伴う制限が解除され、改めて「学校と地域とで協働できること」は何かを教職員全員と地域の評議委員の方々が4つのグループ（①防犯・防災・安全・給食②授業・学校支援③環境教育④教職員の働き方）に分かれて話し合いました。

「田んぼや畑の学習等では、教えてくださる地域の方々との対話を意識的に増やして、子どもたちの深い学びとしていく」「学校で人手などの支援が欲しい時は、自治会回覧板、HPを活用して自治会と学校との連携を深める」「安全・防犯のための見守り活動（にいほる見守り隊）を拡充する」など、多くの貴重なご意見がありましたので、実行できるご意見はすぐに検討していきます。

この学校運営協議会は、社会総がかりでの教育の実現を目指すための組織となっています。横浜市では17年前に設置され、現在は全国小中学校での設置が義務付けられています。しかし、新治小学校では上記の通り20年前から連携・協働による教育が進んでいました。教員だけではできなかった活動が継承できていることに感謝し、これからも、豊かな自然を生かした実体験による活動を取り入れ、子どもたちを地域や家庭の皆様と共に育みたいと思います。ご支援ご協力をよろしくお願い致します。

